

序 文



外傷診療は救急医療の中でも重症患者の時間的な変化量が大きい、ダイナミックな診療分野のひとつです。その変化のスピードや方向性を察知し、迫りくる脅威を先読みしながら、先手を打って行動することが求められます。時間的な変化量が大きいということは、画像が表す（撮影時点での）患者状態と今日の前にしている現在の患者状態がかけ離れていくスピードが早く、画像診断の新鮮さが重要になります。撮影された画像がすぐに診療に活かされ、またタイミングを逃さずIVRで重症患者を救うためには、診療現場にリアルタイムに関与する“現場的”なRadiologyが必要であり、救急放射線の中で最も“現場的”であることが求められるのが外傷診療です。

『画像診断』2013年12月号で「Trauma Radiology入門－外傷の画像診断とIVR－」が特集されて以降、10年間で外傷診療におけるCTを中心とした画像診断およびIVRの位置づけはさらに高まっています。言い換えれば、外傷診療現場の最前線で我々がその“チカラ”を注ぎ込むことで、診療の質の向上に寄与できるチャンスが広がってきているともいえます。外傷診療ではどのようなRadiologyが求められていて、どのように関わっていけばよいか、“Radiologyのチカラ”をどう活かせば救命につながるのか、できるだけ現場的・実践的なエッセンスを伝えたいというのが本書のねらいです。

外傷診療は多職種が連携するチーム医療であり、放射線科医だけでなく、救急医や外傷医を志す若手医師、診療放射線技師や看護師などコメディカルの方々にも幅広く手にとっていただき、本書がチームビルディングや理念の共有を促進する一助となれば幸いです。

現場的・実践的という意図を汲んで素晴らしい玉稿で本書を彩っていただきました執筆陣の先生方、Trauma Radiologyのイロハから教えてくださりこの世界に導いていただいた松本純一先生、外傷IVRとは何かを背中から教えてくださった故 服部貴行先生、多くの重症外傷に対して共に戦ってきた同僚、いつもチームを支えてくれる診療放射線技師や看護師の皆々、企画段階から校了まで粘り強くサポートしていただいた編集部の皆様、妻と子ども達の励ましのおかげでこの本を送り出せることに深く感謝いたします。

最後に、能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、災害、不慮の事故や事件、戦争や紛争など、さよならを伝えられない突然の別れを余儀なくされる方、大切な日常、当たり前なはずの明日を奪われてしまう方が一人でも減ることを心から祈っています。

One for all, All for patients!

2024年1月

国立病院機構災害医療センター 放射線科

一ノ瀬 嘉明